

アメリカ酪農視察研修レポート

別海営業所 相部 宗道

平素は格別の御高配を賜り厚く御礼申し上げます。

平成29年10月2日から11日までの10日間においてアメリカ酪農視察研修に参加して参りましたので、ご報告申し上げます。

研修日程

月 日	研 修 内 容
10月2日	日本からアメリカ合衆国へ移動
10月3日	座学：ミネソタ大学「ロボット搾乳農場の飼養管理」
10月4日	搾乳ロボット農場視察（フィーツァー農場、フェルツ農場）
10月5日	農場視察（アクレス農場）
10月6日	座学：ジンプロ社「乳牛への微量ミネラル給与の重要性」
10月7日	ワールドデーリーエキスポ 視察
10月8日	市場視察
10月9日～11日	アメリカ合衆国から日本、北海道へ移動

今回の視察に際して、アメリカにおける搾乳ロボット農場、大規模農場や共進会を視察する事で、日本との違いを認識し、現場で活用できる技術を学ぶことが私自身の目的としました。搾乳ロボットを導入したフィーツァー農場、フェルツ農場について下記の通りご紹介します。

【 フィーツァー農場 】

- ・搾乳ロボット レリー社A4 6台導入
- ・4群管理 初産牛群2台、2産牛群2台、3産牛群1台、4産牛群1台
- ・平均搾乳回数は2.7回～2.8回
- ・平均乳量 42kg
- ・搾乳ロボット内での飼料給与は1日当たり2kg/頭
- ・TMR水分 60% （この農場では54%を下限としているそうです。）

・初回種付け 13ヶ月、平均初産分娩月齢 23ヶ月

・乾乳牛は4群管理

（乾乳前期と初妊牛、分娩前3週間、分娩前2週間、分娩前1週間の4群管理ですが、飼料メニューは1種類でTMR水分は約50%、低エネルギーと高繊維を主眼としており、年間で第四胃変異の発症率は1%以下とのことです。）

・所感

牛舎内を実際に歩くことは出来ませんでしたが、牛体は綺麗でありました。これは敷料に砂を使用していることとブリスケットボードやネックレールの設置位置が適正で有ることが要因と思われました。また蹄浴や授精作業といった牛舎作業は毎水曜日に集中していました。これは牛の行動を阻害しない事が目的で、群全体として安定性を重視しているとの説明でした。

搾乳ロボットの生産性を高めるために、搾乳ロボット1台につき65頭分の牛床スペースに対し55頭の飼養管理でした。この様な余裕を持たせた管理で平均乳量



フィーツァー農場 搾乳ロボット牛舎

を高めた方が、飼料コストの面からも有効と感じました。



搾乳ロボット牛舎内



搾乳用TMR



乾乳用TMR

【 フェルツ農場 】

- ・搾乳ロボット デラバル社VMS 2台導入、1台につき50頭飼養 計100頭
(別途フリーストール牛舎では約600頭をパーラーにて4回搾乳しています)

- ・平均搾乳回数は3.25回
- ・平均乳量 47kg
- ・搾乳ロボット内での飼料給与は1日当たり3kg/頭
- ・TMR水分 50～60%
- ・本交による繁殖管理で、牛舎内は妊娠鑑定の為、連動スタンションの設備がありました。



フェルツ農場 牛舎内



フェルツ農場 牛床状況

・所感

搾乳パーラー併設の牧場であり、搾乳パーラーとの相性によって搾乳ロボットで管理する個体牛を決めている様でした。これも牛の行動をなるべく制限しない事を優先している考え方に基づいたものと感じました。蹄浴については毎週火曜日に5%硫酸銅液を用いて実施されており、浴槽の長さは当初2.4mにしていたが3.0mに改造したとのことでした。また牛床敷料は、この農場も砂を使用しており、再利用もしているが細かい砂は無くなってしまうとのことでした。



フェルツ農場 搾乳ロボット

今回のアメリカ視察研修の参加につきましては、アメリカと日本では選択できる飼料の種類や気候が違う



搾乳用TMR

ため、日本で活かせることがあまりないだろうと当初は思っていたのですが、それは誤解であり、やはり基本の徹底が高生産維持において大きな要因だと実感しました。そしてカウ・コンフォート、飼料設計内容、従業員も含めた牛舎作業の効率化等を求めた結果が、アメリカ酪農現場の力強さと思えました。

国内でも搾乳ロボットを導入するお客様が増えてきており、とても良い時期に海外視察を体験させて頂きました。あらためて関係各位に感謝申し上げ、今後の営業活動に活かしたいと思います。



雪印種苗株式会社

編集発行人
久保 孝

本社004-8531
札幌市厚別区上野幌1条5丁目1番8号
TEL (011) 891-5911